



第56回書玄展・第6回公募書玄展

と き:令和2年4月7日(火)~10日(金)

と ころ:愛知芸術文化センター8階J室

本年は、新型コロナウイルスの影響で、三月以降多くの芸術文化展や書道展が中止となった。その状況下、愛知芸術文化センターの巨大な建物内で「書玄展」は、唯一の展覧会開催であった。

昭和を生き、一人で作る短歌から大勢とする演劇界へと移行した多才な詩人・寺山修司の言葉を、会員各々が幅広い解釈やイメージ、自由な発想で書の内容に投影した。

加藤裕会長の「秋立ちぬ」三部作仕立ては、一九六九年に「劇団・状況劇場」を主宰する唐十郎が劇団員を引き連れ、寺山

修司の主宰する「天井桟敷」に殴り込みをした事件の新聞記事(コピー)が作品に貼りこまれる斬新な表装。

平野芳碩副会長は「林檎の木ゆさぶりやまず逢いたきとき 修司句」を叙情的に。

阿部秀峰は「あぐら」の大字に寺山について書いた作家・諏訪哲史の文を添えて表現。

後藤啓太は「演劇は万有する流転である」の言葉から「萬有流轉」と10×3尺に漢字四文字で表現。

役員の多彩な大きな作品と、会員の小額作品群の合計二〇一点の表装は、ハガキやポスターでも使用した赤・黒・白の三色を基調としたことで会場内に統一感が生まれ、来場者に好評であった。

愛知県の緊急事態宣言の発出により、会期を四日間に縮小するなど、いろいろな面において印象深い展覧会となった。

ご来場いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。

